

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 99

学校名・団体名	萩市立大島小中学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	ふるさと大島学習～萩大島魅力化プロジェクト～

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 研究の背景

萩市においては、島嶼部や山間部の学校を中心に小中併設の小規模校が多数存在し、地域の特色を生かした小中の結び付きの強い教育活動を実践してきた。こうした中、萩市の学校教育を一層深化・充実させていくために、これまでの「小中連携教育」から「小中一貫教育」へどのようにつなげていくかが課題である。このような背景のもと、萩市では9年間一貫した教育目標を掲げ、子どもたちの学びや育ちを9年間のスパンで捉え、一層きめ細やかで継続した支援をつなぐことを目指し、小中一貫教育をさらに拡充していく方針を掲げている。本研究では、本校が平成30年度から「小中一貫教育校」になるにあたり、その必須条件である小中一貫カリキュラムの編成に焦点化した。具体的には、小中一貫教育と極めて親和性の高い取組である「コミュニティ・スクール」を基盤とし、9年間の系統性・連続性を強化した「萩大島地域の人、もの、こと、情報」を活かした、より実効性のある学校・地域連携カリキュラムを開発し、実践、検証することとした。

萩市では、平成17年度から各学校を「特色ある教育活動推進拠点校（コア・スクール構想）」に設定し、創意と活力に満ちた学校づくりを推進している。大島小中学校は一昨年度までは「漁業学習」の拠点校として、昨年度からは「漁業・農業学習」の拠点校として、特色ある教育活動を展開してきた。特に「漁業体験・海の幸体験学習」は、漁協と学校を中心に地域の方々の協力を得て体験学習を実施することで、地域漁業の復興及び活性化、後継者の育成をねらった四半世紀にもわたって続いている萩大島の伝統的な学校・地域連携カリキュラムである。これまでの「漁業学習」で培った、地域人材や地域素材を学校教育に活かす手立てやカリキュラムそのものが、本研究の土台になると考えた。

研究を進めるにあたっては、

(1) 既存の学校行事や学習活動をキャリア教育の視点から今一度捉え直すことで、それらを通して児童生徒に身に付けさせたい資質・能力が明確になり、児童生徒にとって一層意味のある深い学びを再構築することができる。

(2) 「萩大島地域の魅力化」を実現するための「学校・地域連携カリキュラム」を開発、実践することは、漁業学習で培った「ふるさとへの愛着と誇り」を「志」まで高めることができる。

の2つを研究仮説とし、学校全体で組織的に研究を進めることとした。

2. 「ふるさと大島学習～萩大島魅力化プロジェクト～」で目指したこと

児童生徒は「萩大島地域を魅力化する」という視点で、地域を通して実社会につながる探究的な学びを実現した。この学びでは、プロジェクトの成功や大きさを追求するのではなく、試行錯誤を繰り返し、多くの人々と関わり合いながら主体的に学びを深めていくプロセスを大切にしたい。

そのためにキャリア教育で身に付けさせたい資質・能力の中から特に、「主体性」「関わる力」「粘り強さ」の3つの力の育成を目指した。毎時間の振り返りの中で、自分自身や仲間の成長を図る視点としてもこれらの力を活用した。本授業は、「総合的な学習の時間」35時間で実施し、小中学生が共に学習することを実現するため

に、毎週水曜日の3、4校時に位置付けた。11月の文化祭を成果発表会に設定し、チームごとに見通しをもって、計画的に学習を進めた。

チーム「萩大島の里海」は、「大島の漁業の魅力を伝える」ことを目標に学習を進めてきた。まずは、大島ならではの漁師という仕事の魅力と萩大島近海に生息する魚について自分たちが知り、それを島外に広くPRしたいと考えた。このチームの児童生徒たちの大半の家庭が漁に関わる仕事に従事しているにも関わらず、自分たちがその魅力はもとより家業である漁について何も知らないことに危機感を抱き、漁法や魅力について身近な方々にインタビューすることから始め、漁業に関する情報整理や「立体釣りマップ」の作成など様々な活動へと展開していった。

チーム「萩大島の里山」は、大島の環境や自然の魅力を島外の人に知ってもらうために、まず、どのようなことをすれば魅力を伝えることができるのかを話し合い、「大島をさらに綺麗にする」という結論に至ったが、この活動について考えたとき、①長期的で発展性のある活動になるか、②自分たちの意欲やわくわくする気持ちを継続できるか、の2点に課題があった。そこで、「わくわく感が継続し、大島の魅力を十分に伝えられるもの」という視点で考え直し、「1日開催のイベントを行う」ことを決めた。イベントのテーマを「大島の食材や自然物を肌で感じ、魅力を発見する」とし、目標達成のために「料理班」と「物作り班」の2つの班に分かれて活動した。

チーム「萩大島の伝承」は、萩大島地域の伝統、文化、習慣、風景などを次代に伝え、残していくことを目指した。学習を進めていく中で、児童生徒は自分たちが生まれ育った土地のことを、その成り立ちも含めて全く知らなかったことに驚くと同時に、地域のことを学び、知ることによって喜びを感じるようになっていった。児童生徒は、自分たちの興味・関心に合わせて、さらにポスター班、紙芝居班、地図班の3つのグループで活動を進めた。特に、ポスター班が作成した6種類のポスターは、この取組のPR活動用に、来年度以降も活用していく予定である。

チーム「萩大島の未来創造人」は、まず大島の現状について考え、「人口の減少」と「高齢者の増加」という2つの課題を挙げた。その上で、「来島人口年間200人」と「大島の活性化」という2つの目標を設定し、目標達成のための方策を考え、地域カフェを開催した。第1回目のカフェで得た自らの反省点や地域の方々からの声を改善に活かし、2ヶ月後に第2回目の地域カフェを開催した。また、島外へのPR活動として「TYS（テレビ山口）ふるさとCM大賞」に応募し、「優秀賞」を獲得した。

「学びに向かう力」を育成するために、筆者は、子どもたちのワクワク感や興味・関心をカリキュラムに反映させたいと考えた。「ふるさと大島学習」を行うにあたり、地域に対する児童生徒の興味・関心がどこにあるのか、そして彼らはどんなことに魅力を感じ、ワクワク感を抱いているのか、さらに萩大島の未来をどのように捉え、どのように関わりたいと考えているのかを探ることにし、小学3年生から中学3年生までの全児童生徒に「わくわくエンジンを探るアンケート」を実施し、彼らの興味・関心とワクワクの源を探るために教育相談の場でも活用した。

また、目指すべき萩大島の魅力化に向けたビジョンを共有するために、小学3年生から中学3年生までの児童生徒一人ひとりが「萩大島の魅力化」を目指した「萩大島の未来予想図」と題した戦略マップを作成した。当初、小学生には難しいのではないかと懸念もあったが、地域の「SWOT分析」をはじめ、ここまでの土台を丁寧に築いてきたことで、すべての児童生徒が自らの意志をもって「萩大島の未来予想図」を完成させることができた。

一人ひとりが作成した戦略マップは、前述のアンケート及び教育相談の結果と合わせて4分野のチーム編成の材料とした。また、実際に4チームに分かれて学習を進めた最初の授業において、チーム内で各自の「萩大島の未来予想図」を紹介し合い、その上でチームの戦略マップを作成した。自分たちがこの学びで目指すべき方向性や具体的な手立てを、段階を追って可視化することで、ビジョンの共有ができ、チームの一体感が増した。また、目標達成のための明確な道筋を把握することができた。

「総合的な学習の時間」においては、目標にも示されているように、特に、異なる多様な他者と協働して主体的に課題を解決しようとする学習活動を重視する必要がある。それは、多様な考え方もつ他者と適切に関わり合ったり、社会に積極的に参画したり貢献したりする資質・能力の育成につながるからである。本研究においては、施設一体型の小中一貫教育校の利点を活かし、「総合的な学習の時間」に行う「ふるさと大島学習」では、小学3年生から中学3年生までの縦割り班での学習形態を採用し、上学年によるロールモデルの構築と学び合いによる学習の質的向上を狙った。

さらに、学習指導要領における「児童生徒が主体的・協働的に学ぶアクティブ・ラーニング型の学びの実現」に向けて、「リフレクション（自己や他者のようすについて深く振り返ること）」を学びの中に取り入れたいと考えた。学習指導要領「総則」の「第3節 教育課程の実施と学習評価」においては、学習したことの意義や価値を児童生徒が自覚できるようにすること、そのために評価の場面や方法を工夫すること、児童生徒の発達段階に応じて組織的かつ計画的な取組を推進することなどが示されている。「ふるさと大島学習」の毎時間の振り返りでは、この学習で育成したい「主体性」、「関わる力」、「粘り強さ」の3つの力と学習内容の軌跡、学んだこと、仲間の良さや成長などについて児童生徒自身が具体的な理由も記述して評価をした。記述の仕方や着眼点については、毎時間の全体会において、各グループの担当教職員による指導や模範となる児童生徒の記述内容をロールモデルとして紹介することで、自己の学びを振り返り、それを自分自身やチームの学習に活かそうとする力も育成した。児童生徒の記述に対しては、毎回必ず担当教職員が誤字脱字や表現についてチェックをし、コメントを添えて返却した。そうすることで、児童生徒の「書く」力の育成にも力を入れ、向上させてきた。

「ふるさと大島学習」も「漁業体験・海の幸体験学習」同様、四半世紀以上続く特色あるカリキュラムとして、地域に根付かせていかなくてはならない。そのためには、教育課程を今以上に地域に開き、児童生徒はもとより、地域の方々と共にカリキュラムづくりを継続していきたい。